第８回

薬草だより

川芎は当帰に並ぶ婦人薬の代表です。

樋口 剛央*

生薬名：センキュウ（川芎）
薬用となるセンキュウの基原植物：
・第十六改正 日本薬局方（2011年）
Cnidium officinale Makino（セリ科）
・中国薬典 2010 年版
Ligusticum chuanxiong Hort.（セリ科）
薬用部位：根茎

センキュウは当帰芍薬散、四物湯、芎帰調血飲第一加減の他、多数の処方の構成生薬であり、とくに婦人科疾患の処方にはトウキと共に配合されていることが多く、どちらも重要な生薬の１つです。また、浴用剤としても、入浴による血行促進効果を高める他、香りによるリラックス効果も期待して利用されています。国内のセンキュウの年間使用数量は約400 トンで、生薬の使用量調査品目中、20 位に入る多さです（2013 年 10 月、日本漢方生薬製剤協会生薬委員会調査結果より）。生薬の性状は長さ５～10cm、径３～５cm ほどの節が重なり合う不規則な塊状（写真１）で、外面は灰褐色～暗褐色で表面はコブ状に隆起し、内面は灰白色～灰褐色で半透明です。本質は密で堅く、味はわずかに苦く、独特な強いにおいがあります。本来は芎藭（キュウキュウ）が正しい名称でしたが、四川産が優れた良品であったことから、その通称であった川芎がそのまま生薬名として定着しました。

元来、日本には自生しておらず、中国原産といわれています。江戸時代に中国より栽培株が導入され、それ以降、現在に至るまで継続栽培されている多年生草本です。草丈は 30 ～ 60cm で、春の七草のセリによく似た葉を有し、初夏には白い花を多数咲かせます（写真２）。生育特性として寒冷な気候を好むことから、主に北海道、東北地方、長野県などで栽培され、とくに北海道産は流通量の70％近くを占めます。繁殖方法は栄養繁殖のみで、結実しないため、種子繁殖はできません。栽培周期は約１年で、10 月頃に種芋を定植し、翌年秋の同じ頃に収穫します。北海道では機械化が進んだことにより、大規模栽培が展開され、１畝の長さが数百 m にも及ぶ見渡す限りセンキュウ畑という光景が広がります。1ha（10000m^2）以上の大規模圃場は珍しくありません（写真３）。

収穫された根茎は土砂を除去した後、熱湯を張った大きな釜（家庭用の浴槽の数倍の大きさ）で煮沸し、芯まで熱が通ったら引き上げて乾燥させる加工調製作業を行います。わざわざ重労働である湯通しを行う目的は２つあり、１つめは湯通し処理をしないと根茎は乾燥しにくいので良好な乾燥を行うため、２つめは湯通しして根茎内の澱粉が糊化することにより害虫による食害を防止するためです。秋の収穫時期には、大量のセンキュウが一気に加工場へと搬入されますので、作業はまさに夜通しとなり、収穫が完了するまで途切れなく続きます。

写真１．生薬センキュウ

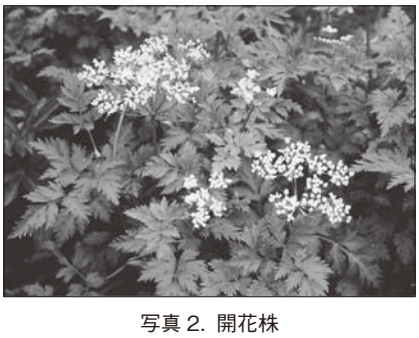
写真２．開花株

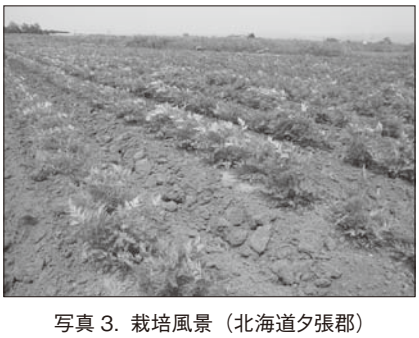
写真３．栽培風景（北海道夕張郡）

＊松浦薬業株式会社